

12) 胆嚢十二指腸瘻からの排石を内視鏡下に観察し得た胆石イレウスの1症例

高橋 光・山口 正康
宮島 透・高木 秋夫 (豊栄病院内科)
吉川 明
遠藤 和彦 (同 外科)
須田 陽子 (新潟通信病院内科)

症例は63歳の女性。平成6年2月15日、外出中に息切れがして倒れ、救急車で近医に搬送された。同院受診時、著明な貧血、その後吐・下血が出現。2月23日、精査加療目的に当院に転院となった。入院時腹部単純レントゲン写真で、小腸 niveau 及び胆嚢の部位に一致した gas 像を認めた。上部消化管内視鏡検査では、内胆汁瘻からの排石過程にある結石を観察し、ERC 検査にて胆嚢十二指腸瘻と診断した。その後、胆石イレウスに対して手術施行。小腸に直径約 3 cm の胆石の嵌頓を認め、また出血源と思われる胆嚢動脈の損傷を認めた。

13) 気圧と虫垂炎

福田 稔・大竹 雅広 (県立坂町病院外科)

H4年2月よりH6年2月迄の2年間で112例の虫垂切除を行い、気圧と虫垂炎の関係を調査した。男性は58例、女性は54例で年齢の平均は28.6才であった。カタル性の虫垂炎の平均気圧は1,011 hpa、蜂窩織炎性では1,013 hpa、壊疽性では1,019 hpa で、壊疽性の値は、他の2群より有意に高い値を示した。また穿孔例は12例であったがその平均値は1,023 hpa であった。新潟市の過去30年間の平均気圧(月別)は、4月～9月迄はその平均気圧は低く、10月より3月迄は気圧が高い事より、この2つのシーズンで虫垂炎の病型をみると、カタル性では偏位はみられなかったが、蜂窩織炎性は4月～9月に多く、壊疽性は10月～3月に多くみられ、特に穿孔例12例中10例がこの期間にみられた。以上より気圧の高低は、人体の免疫能に対し関係している可能性が大である事がうかがわれた。

14) 当院における大腸結核の臨床検討

菅原 聡・姉崎 一弥
波多野 徹・窪田 久
富所 隆・戸枝 一明 (厚生連中央総合
杉山 一教 病院内科)

結核予防や抗結核療法の進歩により、腸結核症を診断する機会もごく稀になってきた。しかし、現在でも腸結核は皆無ではなく、時に他の炎症性腸疾患との鑑別が問

題となっている。過去5年間で当院にて大腸内視鏡を施行され、腸結核と診断された症例について臨床検討した。腸結核の診断は結核菌の同定もしくは結核結節の証明とし、6例の腸結核症例を経験し、大腸内視鏡施行時の主訴は貧血・便潜血陽性であり、ツ応は全てで陽性であった。腸結核と診断時にも肺陰影は認められず、活動性肺結核を有する症例はなく、病変部位は盲腸から右側結腸に集中していた。抗酸菌の塗沫・培養では全て陰性で、内視鏡時の生検組織の培養も全て陰性であった。内視鏡施行時の潰瘍底からの生検で6例中5例に結核結節が確認され、当院では高率に結核結節が確認された。内視鏡所見の潰瘍については黒丸の分類を使用し、Ⅳ型が3例と従来どおり高率に認められたが、Ⅶ型は認められず、治療後は良好な経過をとり、治癒傾向が強いことが確認された。

15) 同時多発大腸癌(13重複)の1例

中山 義秀・吉田 英春
遠藤 雅裕 (県立加茂病院内科)
田中 洋一・藤巻 宏夫
浅利 和成 (同 外科)
山井 健介 (立川総合病院外科)
本間 正一郎 (本間 医院)

症例は43歳男性で、平成5年5月検診にて貧血・便潜血陽性を指摘され近医を受診し注腸透視にて大腸癌を指摘され当科を紹介された。兄が大腸癌。大腸鏡にて進行癌3個、ポリープ10個を認め、11病変は well, 2病変が腺腫であった。9月1日 extended rt-hemicolectomy を施行した。P₀H₀M (-) N₂ (+) 第1癌はCに4.5×5.0 cm, 2型, well, a2 で、第2癌はTに3.5×4.5 cm, 2型, mod with muc, ss で、m, sm の well, mod を7個認めた。n₂ (+) で D₃ を行い、cura A であった。術前 well と診断された1個が腺腫と診断され、2個が切除標本で指摘されず、逆に術前指摘されなかった well が1個あった。6ヶ月後Rに well を1個認めた。以上、2進行癌+11早期癌の大腸癌多発例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告した。